

祈りのルール 第2回

□ イントロダクション

聖書は、祈りを実践するにあたり、いくつかのルールがあることを示しています。該当の箇所をまとめてみると、10のルールを挙げるすることができます。

これらのルールを心に留めることは、私たちが祈りを中心とした信仰生活を進める中で、とても助けになると思います。

□ 「祈りのルール」のアウトライン

1. 祈りは、きちんと組み立てられること
2. 祈りは、日々規則正しく（毎日の日課）
3. 祈りは、むなしい反復を用いてはならない
4. 祈りと 夫婦関係
5. 祈りと 教会の集会
6. 祈りと 異言の賜物
7. 祈りと 家庭生活
8. 祈りに まじめに取り組む
9. 祈りと 断食
10. 祈りを禁じられた事例 についての理解

本日は、第5から第8での4つのルールを扱います。

□ 「祈りのルール」 第5 祈りと 教会の集会

I コリ 11:2~16・・・教会の集会において、男性信者と女性信者が、それぞれどのようにふるまうのが、神の教会としてふさわしいか、について教えている。

1. 男性信者について(4節) 男はだれでも祈りや預言をするとき、頭をおおっていたら、自分の頭を辱めることになります。
 - (1) 教会の集会では、祈りがささげられる。そのとき、男性信者は頭に**被り物**をしていてはならない。
 - (2) 集会以外であれば、男性信者が帽子を被ったまま祈っても、問題ない。
 - (3) 集会では、祈り手だけでなく、そこに参加している男性信者は全員、頭に被り物をしていてはならない。

2. 女性信者について（5節、13節） しかし、女はだれでも祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭を辱めることになります。それは頭を剃っているのと全く同じことなのです。・・・あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。
- (1) 教会の集会では、女性信者は、頭にかぶり物を着けていなければならない。
- (2) 集会以外であれば、女性信者が何も頭にかぶらずに祈っても、問題ない。
3. まとめ：教会の集会においては祈りがささげられる。そのとき、男性は頭にかぶり物を着けていてはならない。そして、女性は頭に何かかぶり物を着けなければならない。
- (1) 米国の諸教会において、今日、この習慣があまり守られていないことは事実である。しかし、それでよいとする理由は何もない。
- (2) もし私たちが聖書のルールに自分たちを従わせていきたいと願うのであれば、集会でのかぶり物についてのこのルールも、私たちが守るべきルールであることを心に留めておきたい。（下線部については、中川先生の見解を6～7ページに記載）

□「祈りのルール」 第6 祈りと 異言の賜物

I コリ 14：13～15 そういふわけで、異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈りますが、私の知性は実を結びません。それでは、どうすればよいのでしょうか。私は霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう。

1. 13節 そういふわけで、異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。
- (1) 下線部「異言で語る」
- ① その人自身は知らない外国語（使 2：1～11）や天使の言語（I コリ 13：1）などで福音の真理を語ること。聖霊の賜物として信者に与えられる（I コリ 12：10）。
- ② すべての信者にこの賜物が与えられているわけではない（I コリ 12：30）。
- ③ 語っている本人にはその内容は理解できない。周りに信者たちがいたとしても、その言語を知らないのであれば、だれも理解できない（I コリ 14：2）
- ④ 異言は聖霊が語らせてくださる（使徒 2：4）が、語るのは聖霊ご自身ではなく、その人の霊である（I コリ 14：14）。
- (2) 二重下線部「解き明かす」
- ① 異言で語られたメッセージの内容を神から受け取って、自分や周りの信者たちが使う共通言語でその意味内容を説明すること
- ② 異言の解き明かしは、異言を語る信者とは別の信者に与えられることが通例

であった（I コリ 14：26～27）。この場合、その別の信者には、異言を解き明かす力が与えられている。これもまた、聖霊の賜物である（I コリ 12：10、30）。

(3) 波線部「できるように祈りなさい」

① 異言の賜物を持っている信者は、異言の解き明かしの賜物を持たないのが通例であった。そこで、もし自分の周囲に解き明かしの賜物を持つ信者がいないのであれば、自分が語る異言について、その解き明かしを求めて祈るように命じられている。

② その理由

- 解き明かしがないと、誰も理解できず、教会の霊的成長に役立たないからである（I コリ 14：5）。
- 異言にせよ、異言の解き明かしにせよ、聖霊の賜物が与えられる目的は、個々の信者のためではなく、皆のため、キリストのからだとしての教会のためである（I コリ 12：7、12～27）。
- 従って、解き明かしを伴わないのであれば、集会で異言の賜物だけを用いるということは、適切ではない。

2. 14 節 もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈りますが、私の知性は実を結びません。

(1) 信者が異言で祈るとき、その人の霊は祈っているが、その人の知性（または思考、英語では mind）はその内容を理解していない。

(2) 異言の祈りについて、【内住の聖霊が祈ってくださっている】と誤解する向きがあるので、注意。

① 異言は、聖霊が語らせてくださるが、語るのは聖霊ご自身ではなく、異言を語る人である。

② 同様に、異言の祈りもまた、内住の聖霊が祈っているのではなく、信者の霊が聖霊に導かれて異言で祈るのである。

(3) よって、13 節の命令に照らすと、信者が集会ではなく、自分ひとりのときに異言で祈る場合でも、その解き明かしを求める祈りをする必要がある。

3. 15 節 それでは、どうすればよいのでしょうか。私は霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう。

(1) 結論として、パウロは、彼が持っていた異言の賜物を用いて、異言で祈ろう（＝霊で祈る）、そして知性でも祈ろう、と述べている。

(2) 14 章全体の文脈から見れば、パウロが異言による祈りと知性による祈りのどちらを重視しているかは明らかである。異言による祈りよりも、理解を伴った知性（思考）による祈りである。聖霊の賜物は、信者個々人のためではなく、皆のため、教会の成長のために与えられているからである。

□ 「祈りのルール」 第7 祈りと 家庭生活

I ペテロ 3 : 7 同じように、夫たちよ。妻が自分よりも弱い器であることを理解して妻とともに暮らしなさい。また、命の恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りは妨げられません。

1. 家庭における正常な夫婦関係は、祈りの生活にとって重要である。この箇所を直訳すると次のように、3つの区分になる。
 - (1) 夫たちよ。同じように、妻とともに暮らしなさい、理解して、
 - (2) その女性に敬意を払いつつ、(その女性は)自分よりも弱い器であるから、(また)いのちの恵みの共同相続人であるから。
 - (3) (そうすれば)結果として至る、あなたがたの祈りが妨げられない。
2. 3つの区分にそって、ここでの勧めのポイントは3つ
 - (1) 妻とともに暮らしなさい、理解して
夫は、妻について理解する責任がある。妻が何を望んでいるのか、妻が何を必要としているのかを理解することである。何をしたら妻は幸せなのか、妻が悲しむことは何か、そのようなことを理解しつつ、妻とともに暮らす、一言で言えば妻のために最善を尽くすのが、夫の責任である。
 - (2) その女性に敬意を払いつつ、(その女性は)自分よりも弱い器であるから、(また)いのちの恵みの共同相続人であるから
 - ① 夫は、妻を理解して一緒に暮らすだけでなく、妻に敬意を払うように勧められている。
 - ② その理由は二つ
 - 彼女は自分より弱い器である→夫は妻を守る責任がある・・・守るということの中には、妻を尊敬するということが含まれる
 - 彼女はいのちの恵みの共同相続人である (このこと的前提は夫も妻も信者であること)・・・妻は夫と共に永遠のいのちをシェアし、新天地における永遠の未来をともにすることになる、このことを心に留めるときに、敬意は払うことは当然となる
 - (3) (そうすれば)結果として至る、あなたがたの祈りが妨げられない
 - ① 逆に言えば、もし夫が、妻を理解し、敬意を払うというルールに従わなければ、彼の祈りは妨げられるということである。
 - ② もし夫が妻と口論ばかり、妻との間に平和がないのであれば、祈る必要はない。なぜなら、神はその夫の祈りを聞かないからである。
 - ③ 夫と妻の間に平和があること、これは、聖書的な祈りのパターンを展開していく上では、きわめて重要なことである。

□ 「祈りのルール」 第8 祈りに まじめに取り組む

I ペテロ 4 : 7 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。

(直訳) しかし、すべてのことの終わりが近づいています。ですから、心を整えなさい、まじめに取り組みなさい、祈りに対して

1. 「万物の終わり」(すべてのことの終わり)・・・ペテロがここで警告する「終わり」とは、エルサレムの陥落と神殿の崩壊である。それは、実際に、紀元 70 年に起きた。
 - (1) イスラエル民族は、イエスをメシアではないと拒絶した。
 - (2) イエスがメシアとして聖霊の力によって悪霊を追い出したことについて、イスラエルの指導者たちが「この人が悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ」(マタイ 12 : 24) と、イエスを拒否したため。
 - (3) これは、聖霊を冒瀆する、赦されない罪(マタイ 12 : 31~32)であり、当時のイスラエルの世代が犯した歴史的・民族的な罪であった。この民族的な罪に対する神の裁きが、紀元 70 年のエルサレムの陥落と神殿の崩壊であった。
2. 下線部の「祈りにまじめに取り組む」とはどういう意味か？ それは二重下線部の「心を整える」とつながっている。
 - (1) 心を整えるとは
 - ① 「正気に返って」(ルカ 8 : 35) という状態である。心が整えられていない状態の最たるものが、悪霊に憑かれた状態である。信仰をもたない人は、悪魔の支配下にあつて、大なり小なり、悪霊の影響を受けている。
 - ② その具体的な描写が、I ペテロ 4 : 3 である。「好色、欲望、泥酔、遊興、宴会騒ぎ、律法に反する偶像崇拜などにふけりました」。
 - ③ 信者となって私たちは、「それは過ぎ去った時で十分です」(3 節) というようになる。そして、「地上での残された時を、もはや人間の欲望にではなく、神のみこころに生きるようになる」(2 節) ことを願う。そのためには、信者は自分を訓練し、神のことばに沿った思考ができるようになることが必要。
 - (2) 祈りとは、神に近づくことである。
 - ① このとき、私たち信者は、無計画で行きあたりばったりではいけない。祈りに関する聖書的なルールに従い、これから自分が祈ろうとする内容を組み立てて、祈りに向かおう。
 - ② もちろん、祈る途中で、神の導きを受けて、用意していなかったことを祈ることもある。しかし、それは、まじめに祈りに取り組んでいるからこそ、神の導きを受けてのことである。
 - ③ 祈りの構成を準備して、祈りに入ることは大切である。

□祈りのルール 第5 祈りと 教会の集会： かぶり物について

【中川先生のクレイ聖書コレクション「コリント人への手紙」65頁より】

このルールの目的・・・創造の秩序を尊重する

1. I コリ 11 章 3 節 すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。
 - (1) 3 節は、創造の秩序について語る。
 - (2) 「かしら」とは、権威ある者、序列が上位の者を指す。創造の秩序の中には序列がある。
 - (3) 男のかしらは、キリスト以外にはない。

2. 7 節 a 男は神のかたちであり、神の栄光の現れなので、頭にかぶり物を着けるべきではありません。
 - (1) 「かぶり物」は、従順のしるしである。
 - (2) もし男が頭に「かぶり物」を着けるなら、その人は被造の世界に自分の「かしら」(3 節) がいることを表明したことになり、キリストを辱しめる結果になる。
 - (3) よって、男は頭にかぶり物を着けるべきではない。

3. 7 節 b～10 節 一方、女は男の栄光の現れです。男が女から出たのではなく、女が男から出たからです。また、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからです。それゆえ、女は御使いたちのため、頭に権威のしるしをかぶるべきです。
 - (1) 一方、もし女が「かぶり物」を着けないなら、それは創造の序列上、女が男の援助者として造られたという事実を否定していることになる。
 - (2) 女は創造の秩序を受け入れているしるしとして、「かぶり物」を着用すべきである。
 - (3) 教会の集会（礼拝）においては、天使たちも出席している。女が創造の秩序に従っているかどうか、関心をもっている。

4. 私たちへの適用
 - (1) これは、男尊女卑や、男性優位の思想を教えているのではない
 - (2) 三位一体の神の在り方を見よ。父、子、聖霊には、序列がある。しかし、それは誰が偉いかという序列ではなく、調和と信頼のためのもの。
 - (3) 男女の間にある序列もまた、調和と信頼のため。パウロは、ここの教えが男性優位の思想と誤解されることのないように、次のように記している。「とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。女が男から出たのと同様に、男も女によって生まれるのだからです、しかし、すべては神から出ています」(11～12 節)

- ① 男女の間に優劣はない。あるのは、役割の相違である。
- ② 「かぶり物」に関する教えは、不道德なコリントという町の特殊状況の中で理解されるべきもの（その説明は、同書 63～64 頁）。現代の教会に、この教えをそのまま適用するのは無理がある。
- ③ ただし、原則は適用できる。原則とは、クリスチャンは礼拝の秩序を乱してまでそれまでの伝統や習慣を否定すべきではない、ということ。調和と一致こそ、私たちが目指すべきものである。